

日本ロレンス協会第 51 回大会プログラム

(ヴァーチャル研究発表会)

◎日 時： 2020 年 6 月 20 日（土）～6 月 27 日（土）

◎場 所： web 上で動画を視聴。別途送付の一斉メールにて質問・コメントを行う。

【アクセス方法：上記、別途送付の一斉メールにて、動画の URL をお知らせしますので、そちらから動画にアクセスしてください。】

◎開会の辞： 会長 田部井 世志子（北九州市立大学教授）

研究発表 1

司会 青木 晴男（高知県立大学名誉教授）

Lady Chatterley's Lover における男性性の再生 ——D. H. ロレンスの教育哲学の検討

杉野 久和（京都大学大学院生）

（要旨）

Lady Chatterley's Lover は、学校教育で失われた男性性を再生させる小説と解釈出来る。D. H. ロレンスは、生涯、教育に関心を抱き続けた。約 7 年もの間、学校教育に従事し、学校現場を離れた後も“Education of the People”を執筆するなど教育学的な論考を複数書き上げた。*Lady Chatterley's Lover* の登場人物たちは学校で教育を受けており、作品の結末では教育への接続が示唆される。“A Propos of *Lady Chatterley's Lover*”でもロレンスは教育に言及する。彼が指摘していた問題点の一つは、学校教育の結果として男性性が損なわれることである。

Lady Chatterley's Lover では、男性性の欠如と、その再生が描かれる。ケンブリッジで学んだクリフォードは社会的成功を収める一方、彼が私生活で失敗するのは心身共に男性性を欠くからである。かつて優等生であったメラーズも男性性を欠いてはいたが、再生させる。そして、彼の男根がコニーの奥深くに触れる。心身ともに男性性を再生させたメラーズが、“The Grange Farm”で教師を志す少女の課業を手助けする姿は「未来への橋」渡しと解釈できる。

本発表は、ロレンスの教育哲学を検証し、*Lady Chatterley's Lover* の読解に新たな視点を提示する試みである。

研究発表2

司会 山田 晶子（愛知大学名誉教授）

Women in Love の ‘The Industrial Magnate’ に見る、レフ・トルストイへの応答

大江 公樹（早稲田大学大学院生）

（要旨）

D.H.ロレンスが強く意識し続けた作家に、ロシア人作家レフ・トルストイがある。ロレンスは青年期から晩年に至るまでトルストイの著作を繰り返して読み続けた。ロレンスの手紙、評論、そして詩におけるトルストイへの言及は、しばしば激越であり、F.R. リーヴィスやレイモンド・ウィリアムズが指摘するやうに、精緻に欠ける嫌ひがある。しかし、ロレンスの小説には評論等と比べて、冷静かつ入念なトルストイに対する応答を見出すことができる。*Women in Love* 第十七章の‘The Industrial Magnate’における、「常に自分の信念、慈善と隣人への愛に忠実」であり、労働者に崇拜の念を抱く炭坑主、トマス・クライチの描写もそのような応答の一つである。クライチの描写は、後年の評論“The Novel”における「吐き気を催させる自己流キリスト教同胞主義の哲学者」といふトルストイ評、またロレンスがトルストイの小説の中でも特に関心を持つてゐた『アンナ・カレーニナ』に登場する貴族レーウインの、農民を救ひ上げようとする態度と重なる。本発表ではトマス・クライチの描写を、『アンナ・カレーニナ』におけるレーウインの描写と比較考察することで、ロレンスがトルストイへの応答において、自らを取り囲む現実を出発点にしたといふ側面を明らかにすることを目指す。

【役員会】別途、後日メール（あるいは郵送）にてご案内いたします

【総 会】別途、後日メール（あるいは郵送）にてご案内いたします

◎閉会の辞： 副会長 石原 浩澄（立命館大学教授）